



I はじめに

映像からの基調提案の確認をし、討議の柱の確認がされ、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

(1日目)

一報告1—⑭

「地域とつながり未来につなげる～いまいる場所から未来の居場所へ、豊かな進路保障のために～」
(大阪府人連)

一主な質疑と意見一

京都 働き方改革が進む中で、学校の全員が支援の限界を広げてき、学校としてできることを探っていくという姿勢が、福井高校の中であるのか。もしあるとしたら、どのような形で、そういう風土や空気を作っていたのかを教えてください。

滋賀 保護者の生活がなかなかうまくいっていないような感じがするが、保護者への生活、就労などの支援はどのようなことがされていたのか。

報告者 ユースカフェなどで大人どうしが繋がり、子どもがそこへ日常的に行っているんだと思ってもらったり、子どもの気持ちをそこで聞いてもらうように任せていいんだということを教員に発信している。学校もその分、仕事の幅とかたくさん開拓できていると感じている。学校の教員は、いろいろやらなければならないという固定概念を1回取り払うことが大事だと思う。保護者支援に関しては、市との連携を非常に細かく行っている。働き方改革を進めていかなければならないが、基本的にはやはり学校で我々教員が、児童生徒のことを一生懸命指導、支援することに注力しており、保護者まで支援を行き渡らせるのは、物理的になかなか難しいというところがある。そういうところから市に、我々がするので、何かちょっと作戦考えましょうという形でやっている。例えば、保護者に対して、Aからこういう話を聞きましたので福祉課の方の担当者に繋ぐので、福祉の方から家庭訪問をさせて頂きますというように連携をしている。

東京 Aはお母さんのことをどう思っているのか。Aのお母さんはどのように生きてきたのか。生活状況とかお母さんはどんな生き方をしてくてここにきているのか。Aのお母さんのことを学校はど

う思っているのか。

報告者 Aは保護者に対してマイナスの気持ちは全くもっていない。むしろ、自分の家とか、自分の保護者はこうなんだ、世の中そんなもんなんだと思っている。思春期に親に反発するようなところは、高校3年間でも見られなかった。保護者はAに対して依存傾向はずっと見られるけども、18歳になって社会的な選択ができるようになる段階になった時に、保護者がそれにストップを掛けさせるのではなくて、AはAで自分がやってみたいと思う選択ができるように自立化するためにはどうしたらいいかというところを考えていた。福祉課の方からAが大学に通うことになって、いつかはこの家から出ていくのだろうとなった時に、保護者がある程度の生活ができるように、就労に対してアプローチしていただいた。保護者がどのように生きてきたかについては、未だに小学校の教員からの引き継ぎでも見えてないところがたくさんある。過去に保護者は非常に困られて、社会保障を求めて、行政に頼られたが、その時に良くない対応をされ、あまり良い印象を持たれなかったことから、社会から支援を受けることを拒んでいた。近隣に祖父母が住んでいて、Aが住んでいる家は、その祖父母の名義の集合住宅の一室。そういった形で支援してもらっていた。Aの保護者とAに対して、もっとできることがあったと今は思う。

滋賀 こういう環境に置かれた際には、自分の未来に向けた考え方を、どのようにもったらいいいかわからない子どもがいると思う。そういう時に家庭環境も含めてどのように支援されているのか聞きたい。外部機関とともになにかをやるという時には、どうするのか。

報告者 総合学科というところで、様々な仕掛け学習を授業の中で、体系的に取り入れている。その1つの中には課題研究や、総合的な探求という時間で、1年生の段階からかなり多くのキャリア学習や、自己実現のための様々な学習を行っている。総合の時間やホームルームを通して色々なところと連携を始めている。働くことはどんなこととか、社会ってそんなに悪いことじゃないというところを、教科書を使う授業以外に、学習機会として設けている。市町外との連携について、本校にいる生徒の中で、ケース会議を児童、生徒の出身の市役所や教育庁から求められるケースや小学校、中学校で市役所や教育庁と関わりのないケースもある。そういった場合には、高等学校から市役所にケース会議を求める場合もある。

宮崎 なぜこのカフェ事業が始まったのか。

報告者 ユースカフェのスタートは高校としては学校の先生だけでなく、学校の先生だけじゃ掴みきれない背景を持った生徒、特に本校近隣の中学校から進学してくる生徒が積極的に頼れる方々がいるんだという関係づくりがスタートになっている。Aは自分とは別の角度で厳しさを抱える同級生と出会ったりしていく中で、やっぱりこんなことやっ

てみたいとか、それでも自分が将来、昔から興味を持っていたことを専門分野の専門職で勉強しながら仕事したいというところを持っている。

大阪 日本語指導を必要とする生徒の受験枠を持っている高校が、大阪には8校程度ある。その中でも福井高校は、なかなか大変な子どもたちを受け入れてくれて、現場としては子どもたちにとってもとてもありがたい高校。私が関わった外国籍のニューカマーのいろんな子どもたちを福井高校が5人も6人もサポートしてきた。もう退学かなっていうところでも、福井高校の先生たちは温かく、何とか卒業させてくれた。生活が苦しくて進路もなかなか大変な子どももたくさんいる。福井高校の日本語指導が必要な子どもたち、外国人の子どもたちの進路はどういう位置付けがされているのか。

報告者 2015年から外国にルーツを持つ生徒、日本語指導が必要な生徒の特別学級選抜を実施しており、ちょうど10年の節目を迎えたところになる。今年度は、校内に53名、外国にルーツのある生徒が在籍している。日本語指導とともに、それぞれの生徒が持っている母国語、言語の文化や言語力を母語指導や日本語指導とのバランスを取りながら授業を行っている。卒業後は多くの生徒が、大学への進学を希望していたり、最近では自動車関係の専門学校、またはルーツによってはレストランを営んでいて、家業を継ぐという生徒もいる。本校総合学科の中では、大学、専門学校、就職というところを1対1ぐらいの割合で、かなり進路のバリエーションに富んだ学校でもあり、そういった外国ルーツの生徒たちに対して、日本で生まれ育った子どもたちと同じような就労指導の流れがある。外国ルーツの生徒の経歴に対して、入試制度や大学に入ってから就学支援制度が、整ってきているというところもある。

一報告2-16

「自分、まだまだっすわ〜びわ南高校生集会でAから問われたこと〜」(滋賀県人教)

一主な質疑と意見一

東京 Aの背景や生活を教えてほしい。

報告者 Aと高校生集会の実行委員で関わることはあったが、そこでの情報以外はわからない。

兵庫 私はAさんと報告者の関係というのは、例えばAさんが教師、報告者が生徒として考えた時に、マジョリティの中で差別に対して、困った人に対して支援していくとか、応援していくというのは、本来ならば報告者が学ぶことではないかと思う。マジョリティとマイノリティの考え方を見ると、マジョリティの中にマイノリティを支援していく人を育てる、これはやはり教育の根本的なところもあると思う。マジョリティの中からそういう少数派の方の支援をしていく、声を上げていく。差別があったらダメだという声を上げられるというような社会の1人になることをめざさなければいけない。報告者

はAさんを通じて、そういう意識が芽生えているかどうか聞かせてもらいたい。そういう人権や差別、マイノリティの方に対しての自分自身の思いを聞きたいと思う。

報告者 私としてはこの高校生集会にかかわる前にセンターに勤務させてもらう時に、地域の人と話をさせてもらう機会があり、その中でこれまでどんな人生を送って来られたのかという話も聞かせてもらいながら、部落差別の実態などについて具体的に聞きながら、自分自身この職場でしっかりと取り組んで変わっていききたいなという思いもあった。差別をなくす側として取り組んでいきたいという思いがあったので、もちろんこの高校生集会以外の取組もその目的のもと、必死に取り組んでいるつもりでいる。僕も今キレイゴトが何かというのでぐちゃぐちゃになっているが、Aはもうこの辺も吹っ切れているというか、そういった部分でも自分より先に進んでいると思う。Aが高校生集会でどれだけエネルギーを持ってやってきたかという姿は、間違いなく自分の背中も押してくれているし、そういう部分でこのAから学んできてるところもたくさんある。私も差別をなくす側としてこれから取り組んでいきたいという思いでいる。

新潟 昨年の30回の実行委員会で、Aさんがその他の子たちに「キレイゴトっぽい」と言われて少し動揺している場面があった。この時に、Aさんは自分の思いを周りの子たちに伝えること、そして共有することはできたのか。「キレイゴト」という言葉を使ったAさんが最後には「『キレイゴト』と言われても自分はきれいな世界に生きていきたい」と言っていて、1年間で決意とか固まっている感じもするのだが、Aさんのその変化とか成長みたいなものを、報告者はそばで見ている、どのように受け止めたのか。

報告者 「キレイゴトっぽい」という言葉の経緯だが、まず、みんなとこれについて共有して考えたいというのが、Aの一番の思いとしてあったのではないかと思う。この「キレイゴト」と言われたことを取り上げて、2月の集会当日のなかで、参加者全員と議論を深めたい、みんなで考えていきたいという思いを持っていた。残念ながら、Aの担当していた分散会では、当日欠席したメンバーもあり、Aがその分散会をしっかりと回さないといけないと、余裕がなくなってしまったこともあり、この「キレイゴト」について、Aの分散会であまり議論を深められなかった。Aの中では、その分散会では議論はできなかったけども、それに至るまで実行委員会で話したり、これに関わっている保護者の方からご意見をいただいたりしながら、自分の中で考えも深めていたりということもあったのかなと思う。この「キレイゴト」について少し喋る機会があった時も、やはり自分は「キレイな世界を目指して行きたい」という心は話してくれていた。彼自身、自分はそこをめざして行きたいということで話をしていた。

滋賀 琵琶湖南部高校生交流集会の顧問をさせていただいて、もう 30 年来関わりを持っている。報告者の話にもあったように、スタートは結婚差別で、被差別部落の女性が自死し、彼女の誕生日に今度は相手の男性が亡くなるということがあった。部落差別で人が死ぬのは被差別部落の人だけではないというところから、地域の中でいろいろなことを話ができる環境があれば、もしかしたらこの命は奪われずに済んだんじゃないかという地域の思いがある。滋賀県の南部は少数被差別部落が多い。自主活動といっても、中学生、高校生になると 2 人、3 人しかおらず、部活動をしているとほとんど出会えなくなる。そういう状況があったので、自主活動の延長線上の場として地域の高校生がみんな寄れるものを作って行こう、というのが思いの出発点としてある。周辺の六つの市を全部巻き込み、現在は六市が予算化して運営費用を出してくれて、六市の持ち回りで運営をしているという状況。部落の子どもたちだけではなくて、いろんな思いを持っている子どもたちが、「びわ南」に来たら受け止めてもらえる、「びわ南」で思いを伝えたりできる中で運営をしてきている。僕らも部落差別は部落の人だけのために何とかしようという問題ではないと思っている。「部落差別がある社会を支えている僕らの問題だ」という当事者性を、僕ら自身も明確にしながら取り組んでいる。そのことを次世代の高校生たち、次の社会作ってってくれる子どもたちにしっかり伝えて行こうという思いがある。高校生たちには、立ち上げ引き継ぎ、ずっと長い中で取り組んできたそれぞれの思いを伝え、今年も君たちが最高の集会作ってほしいという思いも伝えている。「キレイゴト」についてなのですが、去年、実行委員会の集まってきた高校生たちが、その中でこういうことを言い出す。「そういえば学校の人権学習って何だろう。みんなが講演聞いて、あるいは映画見て、最後に感想を書く。「数学とか英語の授業が終わって、感想を書かされたことがないのに、なんで人権だけ書かされるんや。しかも先生は感想を話さない。これっておかしいよなあ」と言って、A さんの「キレイゴト」から始まって、実行委員会の子どもの中でそういう議論が出てきて、それを劇にしようとして進んでいった。去年の実行委員会の子たちが一番突きつけてくれたものは、僕はそこにあったと思う。人権学習に取り組むということは誰のための問題なのか、そもそも学校でやってる人権学習って何やねん。なんでこれだけ感想書かすの？なんで先生はしゃべらへんの？今までもそういう問いはありましたけれども、実行委員会としてそれをしっかりと提起してくれた。「キレイゴト」でない、そこを超えていけないと、差別はなくせへんよなっていう議論を、それぞれ喋ってくれて、何人かは今年も OB として参加してくれている。今年の全人教のスローガンは申し訳ないが、僕はみた瞬間に「人類普遍の真理を探求し」って、こんなんどうでもええやろと感じた。ここに参加されてる何千人っていう

人達が、これだけの言葉で何か共有できるのか？「人類普遍の真理」でなくて、「しんどいと言ってる子をどうすんねん」そこが出発点じゃないのかと。そこをおろそかにしながら、人類普遍の真理というのはそれこそキレイゴトではないのか。学校現場の人権学習の課題もあるが、そこを何とかして本当に差別をなくそうとしている研究大会が人類普遍の真理を探究してもよいのか、このことを皆さんで議論していただきたい。無くすべき差別がどこにあるかと考えたときに、自分に矢が向いてるかどうかってことを考えなければならない。「当事者性」という言葉が、すごく言われるようになってきた。差別をなくそうと言っているその差別がどこにあるか分からない状態で、差別なくそうって、それが掛け声だけじゃないですか？本気でなくしたいと思ったら、どこにあるか考えなければならない。差別をなくそうという取り組みのラスボスは自分の中にいる、というふうに僕は思っている。そういうことを高校生たちが突きつけてくれた。教えてくれた。高校生から問われている。その問いに僕らが何と返せるのかということ自分を矢を向けながら、やっぱり喋っていかないといけない。本気で差別をなくすにはどうする事ができるのかっていうことを、是非 2 日間の分散会の中で議論していただきたいと思っている。

滋賀 私は、琵琶湖の北の方に位置する方に住んでいるので、この「びわ南」という組織をあまりよく知らない。僕は単純に報告者の話を聞いていて「キレイゴト」という言葉に引っ掛かりを覚えている。この「びわ南」という組織が 30 年ぐらい前の命を絶たれたというところにスタートがあるとすれば、命を絶つていうのはほんまにとんでもなく大きな出来事なわけだが、それに対して、今我々が学校でやっている人権教育、人権学習で、そこまで迫り、命がかかっているような出来事もあるんだと考えながら取り組めるのかなと。先ほどあったように映画見せて終わりとか、誰かに講演させて終わりとか、わかったような顔して喋って終わり、感想を書かせて終わりみたいな、そういう人権学習がひよっとしたら増えるのではないかという気がする。それは、我々が子どもにどこまで関わっているのかとか、そういったところが問われているのではないかなとも思う。その意味では「キレイゴト」という言葉が突きつけられているのは我々自身だし、我々自身が検討していなければいけない部分。次の世代をどう作るのかってことが結構言われている。次の世代の子どもたちをどう作るのかと考える際に、こうやって子どもたちが集まって語り合っている場はものすごく意味があるという気がしている。そんな場に対しても、ややもすると指導的な喋り方をするとか教えなければとかそういう立場で関わる事がないだろうか。学校の人権学習についても我々は教えるという視点で喋ってないかという気がしている。70 回以上この大会をやっているにもかかわらず、あらかたの人権問題とか部落差

別もそれなりに取り組まれてきたものはあるのだろうけれども、まだ完全に無くなっていないところが課題だとおっしゃっていた。その無くなっていない部分を次の世代には残していかないといけないのだろうけれど、その時に今いる我々はやっぱり子どもたち示さないといけないのではないかという思いがある。我々が本音で喋る、そういう場を設けて一緒になって考える、そういう我々にとっても居場所が作られるっていうことは大事なことかなと思う。

宮崎 私も報告者と同じように担当として被差別部落に関わるようになった。差別の現実を聞く中で、やはり差別をなくしてほしいという願いとか思いをどんどん自分自身を感じてきて、それを感じると同時に、無関心であった自分の差別意識に気付いていくが、結局その方向に自分自身が向いてなかった。現実には差別があるということに気付かなかったし、それで苦しんでいた、苦しめているのが自分自身ではないかというところに思い至らなかった。色々なお話を聞いたり、議論をしたりする中で、段々とこの差別のある社会を解決に向けて、自分も一歩踏み出して行きたいなという感情を抱くようになった。報告を見た時に、とても A さんのことを羨ましく思っているように私は感じた。自分も被差別部落の子どもと関わる時に、やはり生徒としてしか見ていなかった。生徒としてこの子を教えないといけない、人権について考えさせないといけない。そういうことから関わっていったが、いつの間にかその子が言っていることが、自分にも刺さるようになる。ふと気付いたのが、教師と生徒の関係ではなくて、いつの間にか人と人の関係になってくる感じがした。報告者は A さんを人として尊敬しているとすごく感じた。A さんのこと格好いいと思っている、その姿勢が格好いいと、私はそんな風を感じた。

滋賀 僕自身も若い頃から、同じように子どもの人権を踏みにじって、強いチーム、強い選手を作ろうみたいな感じでずっとやってきていた。僕自身ハツとさせられたのが、16、7 年前に地域の子が「先生、今でも差別ってほんまにあんねんで」と話してくれたことがきっかけ。「こんな子がこんな事を言わないかんような世の中をなんとかしないとイケない」という風に思ったのが、僕がこの世界に足を踏み入れるきっかけだった。僕自身が「キレイゴト」なのかどうかというのは、自分がどこに立ってものを見ているのかということ、自分自身の実践がどれだけ伴っているか、自分に矢印が向いているかどうか、そういう事を考えないと「キレイゴト」になってしまう。自分の実践が伴ってなかったら「キレイゴト」になるというところがポイントかなと思っている。

兵庫 今日もこの全人教に参加して良かったと思っている。私は 10 代から今まで活動を続けている。今やはり運動体は衰えてきているが、私自身がなんで続けていこうかと言ったら、やはりまだ差別が

なくなっていないと感じるから。私自身は高校の時に自分が当事者って言うことを知らされた。それは本当にただ映画を見ただけの人権学習。映画を見た時にはまだ自分自身のことは知らなかったが、その後友達からあんた部落の子やでって言われた。それが自分が当事者って知ったきっかけなのだが、すごくショックだった。高校では部落問題から逃げてきた。高校卒業してから、友だちとの出会いで、部落差別について正しく知った。それを知ったことで、なんで私らがこんな目に合わなあかんねんって、何も私は悪いことしてないやんって。私は被害者やんって、なんで私らこんな苦しまあかんねんって思えた時に、やはり運動の中でしっかりと訴えていかなければと思いました。また自分自身も強くなっていかなあかんって思ったのがきっかけで、今まで続けている。しんどい思いを子どもにはさせたくないと思って子育てをしてきた。子どもももう 50 歳過ぎてているが、やはり結婚したいと思っていた家族から、すごい反対されて傷ついた。泣きながら家族に許してほしいって言いに行った時に反対されたことを話している時に、私はなんで、この子がこんなに苦しまあかんねん。私の子どもがなんでこんな思いをしなければならんだって、心の中では叫びましたけれども、言葉にはならなかった。背中をさすってあげることしかできなかった。子どもは解放区の中で育てて一時期本当に死ぬとこまで考えてるんじゃないかなって思う、そこを乗り越えて、今は元気にやっている。必死で差別に負けない、乗り越えていける力をつけようと思って努力しても、周りが差別をなくす社会でなかったら、潰されていく。だから私はそれを声を大にして訴え続けている。社会の問題、みんな一人一人、差別をなくすのはみんな当事者、みんな一人一人だということをお願いしている。これは「キレイゴト」でしょうか。報告者がおっしゃった、自分自身は差別をしてないと思ってた時期の「キレイゴト」と、今ご自身で思われてる「キレイゴト」の違いは絶対あると思う。だからその辺も、私は、聞いて、この全人教に来て、いろんな方のお話を聞いたことを、ここに自分の力にして、また地元を持って帰って、言い続けなければならんだっていう風に思ったし、そうしていきたいと思っている。

一報告3-⑮

「77 期生の軌跡～77 年後も笑い合える仲間をめざして～」
(大阪市人教)

一主な質疑と意見一

大阪 報告にでてきた 2 名の生徒の高校での生活の様子、特にさくらさんの家庭での様子とかで何か知ってることはあるか。

報告者1 カタリとさくらは同じ高校に進学している。さくらは進学を決心しながら一時、金銭面で迷惑をかけたくないという思いから「私立受験はしない」と言って、不安定な時期もあった。その時、母か

ら「気にせずを受けたらいい。」という風に背中を押してもらって私学受験を無事終えた。公立高校も、見事合格したが、受験直前まで不安になったり、安心したりの繰り返しで、ずっとそわそわ過ごした。2人の通う学校は地元からは離れているが、さくらに関しては、新たな環境でいろんな人間関係を築いて頑張っていきたいという気持ちが現れていると思う。カタリは、日本語の成長が著しく、クラスの人気者になっているようだと言っている。さくらの生活に関しては、はっきりわからないが、中学校の間は、受験が終わるまで祖父のもとで過ごす、受験が済めば家に帰ると言うことを言っていたので、きっとそうなっていると思う。

兵庫 「サークル活動」について、いわゆる部落の子とか当事者の子どもたちは、このサークル活動に対象の子全てが入っているのか。また、「サークル活動」ではどういう活動をされているか簡単に教えてほしい。

報告者2 朝鮮文化研究会に参加できる生徒としては、朝鮮にルーツがある子どもたち。民族講師が毎週のように来て、一緒に歴史だったり、文字だったり、文化だったり、いろんなことを学ぶ活動をしている。障がい児・者問題研究会、部落問題研究会、国際文化研究会の3つのサークルに関しては、ルーツがなくても入れるようになっている。その中でも、国際文化研究会は、韓国朝鮮以外に、外国にルーツを持つ子どもたちが集まっているが、半数は日本人の子どもたち。部落問題研究会は、主な活動内容として、和太鼓の演奏をしている。なぜ和太鼓の演奏をするのかということもきちんと学習をした上で、昔、地元で和太鼓の生産が行われていたこと、この地区にはそれを生業としている方々がいて…というのを、しっかり伝えて、夏にはフィールドワークにも行って、しっかり理解した上で、演奏をするようにしている。障がい児・者問題研究会に関しては、畑で活動もして作物を作ったりしていて、モルックとか、ポッチャなどのスポーツにも挑戦して、幅広く活動をしている。

東京 さくらは、報告集にある文章では、お母さんのことに関して、「お父さんとのことに無関心」と書かれているが、お話の中で祖父のところ暮らしでいるさくらさんのところにお母さんが行っていたり、私学受験を経済的な面で諦めようとするさくらさんを「大丈夫だよ」と背中を押したり、とてもお父さんのことで「無関心」だったとは考えられないと思うが、お母さんに聞いたことはあるか。

報告者1 無関心という表現が誤解を呼ぶところもあった。直接聞いたことはないが、父がDV傾向の人で、母は父に何かを言えなかった状況は周囲から聞いている。さくらの3つ上の、1番上の兄はそういう経験から何か指導をされる、注意をされる時に、女性の先生が注意している時の様子と、男性の先生が注意している時の様子で全然違った。男性の先生が注意している時は、怯えたような感じで、兄の様子から、推測ではあるのですが、そうい

うような状況があるのかなと思っている。

滋賀 さくらの場合にしてもカタリの場合にしても、ユウとかハルとか、支える仲間がいてくれた。そういう支えられる仲間の人間関係とか、それを作ってという部分で、報告の中にある「1人1人のしんどさを、一個人の問題とはせず、周りの仲間や教師達も一緒になって、その問題に向き合い共に考えた」という部分について具体的に聞きたい。また、支える関係性で、実際に子どもたちの関係性を実践につなげていく仕掛けというか、具体的にどう取り組んでいったのかを教えてください。

報告者1 「感想文」は大事にしている部分ではあった。人権学習に対して、みんなはどう思いましたかというような、課題を提示する。書いてもらって、返して。それをそこで終わりにするのではなく、学級通信や人権学習の学習通信みたいなもので、フィードバックをする。名前も付けて、この子はこういう発言、こういう感想を書きましたという場合もあれば、プライバシーのところではあまり名前を言わない方がいいかなというところに関しては、そこは伏せてフィードバックをする。1つの学習に対して色々な意見が出ることに触れる機会は、中学生においてすごく大事な事かなと思っている。自分はこう書いたけれども、他の子はこういう風に考えていると、思いを共有する、掴む機会として、意識して感想文を書いている。そうすることで、この子はこういう関心を持っているんだ、ああ、こういう感じ方をしているんだなど他者理解にも繋がっていき、互いに支え合えるような雰囲気感も作って行くことをねらいとしてやっていた。あとは人権学習をする中で、我々が特別な実践というのは、特にできていなくて、それこそ「教える」というよりは、「共に学んでいく」姿を、そういう空気感を子どもたちは感じ取ってくれるのかなと感じている。実践の中身と言われると、今までやってきたことと、その77期生が入ってからやり方をガラッと変えた。それは我々だけではなくて、その学年にいたベテラン教諭が、ちょっとこうしてみようやという提案のもと変えていってくれた。それに我々は自分たちの感覚で今の子どもたちに合うようなやり方に少し変えさせてもらったりもある。

報告者2 本校は日本語教育センター校が開設されていて、渡日生がたくさん来ている。それによって淡路中学以外の学校の渡日生がたくさん、校内で普段の学校生活の中でのいるような状況がある。普段授業も別ですし、教室も離れているのでたくさん接点があるわけではないが、これも多文化理解につながるきっかけにならないかと、日本語教室の先生と話していて、今まで国際交流サークルで生徒だけで行っていたクリスマス交流会を日本語教室の生徒を呼んで一緒に活動しませんかと呼びかけたところ、本当にたくさんの渡日生が参加してくれた。隣の小学校の国際クラブの子たちを呼んで、うちの生徒も合わせて70名近い生徒が集まって一緒に活動をした。その中でいろんな言語

が飛び交っていて、日本語より他の言語がたくさん喋られている環境の中、一緒にスポーツをしたり、ゲームを楽しんだりした。言葉で通じないこともジェスチャーで伝えたりすること、まず関わりを作ってあげることで相手の理解に繋がると考えている。その日本語教室に通っている生徒も、本当にその日を楽しみにしていて、本当にいい空間を作れたと思っている。まずはそういう機会を作って、外国人に対する偏見だとか、知らないことは怖いということに繋がるので、まずは知るといってきかけを私たちが作ってあげないといけないなど、この中学校での出会いが、その子の中の意識につながって、変わっていけばということを実践の一つとしている。

協力者 先ほどの打ち合わせの中でも、やはり時代的に、例えば部落差別に関しては、宣言をしてない子も親も知らなかったりという家庭も増えてきている中で、どうしても本人が知っているかどうか把握しづらくて、以前のような学習の仕方が難しくなっている現実があるという話があった。それで今、目の前の生徒たちに伝わる形での学習をいろいろ工夫してやってこられたということを知りました。身近な問いに変えて、まずは知るところから、その差別を受けている人とか、いろんな立場の人がどういった思いを抱いているのだろうかということを知るところから学習をスタートされているという風に聞きました。

滋賀 僕は、そうやって知った子どもたちが実践してる所がすごいなと思っている。知って動かないことがある。このユウさんとハルさんは、支えるという形でさくらさんとカタリさんに関わっていている。関わっていける関係性を持って動いている。僕はそこがすごいなと思っている。こうして子どもたちが「動く」、何かそのための仕掛けがあったかなって思いで、先ほど質問したが、お互いが理解できるように仕掛けはしているとおっしゃっていて、なんとなくその辺からスタートなんだと思った。とにかく僕らは「動かなあかん」とに思っている。

大阪 私は淡路中学校に勤務していたことがあり、54期、57期を担当していた。先生がおっしゃったのは空気感、空気作り。これはAIじゃできない。タブレットじゃできない。それは「私たちだからこそ」できることだと思う。自分に返さなければならぬ。「お前何やってんねん」って、「差別はそこにある」と指を指すと、指している指は1本で、残り三本はこっちを指している。絶えず、自分に返さなければいけない。空気感も、ほぼほぼアドリブ。でもそのアドリブがどんな時に出てくるかということ、日々の練習、日々の実践。それを積み重ねてアドリブができると思っている。そういうことを大事にしてきた。

報告者2 私は今年34だが、実は淡路中学校に7年勤務している。最初の4年間は講師だった。正直、中学校で教員をずっと続けていくのも、どうなのかなって思っていた。淡路中学校来る前に、高校で

講師をしていたので、中学生というのに戸惑いもあり、大阪のこととか詳しく分からず教員になった。その時に周りにいた先生方が、「朝からまだ来てないわ」とか言いながら、空き時間見つけて家に迎えに行ったり、何回も電話して連絡して「やっと繋がったわ、行ってくるわ」とか、そういう姿が日常的にあった。そんな先生に出会ったことがなくて、こんなに子どものこと、自分の子どものように思っ関わってる先生方ってすごいなと本当に思った。それまではどちらかという淡々と仕事をしてきた人間だったのだが、自分がもし結婚して子どもが生まれた時にこういう熱い先生にいてほしいなとすごく思って、私も変わらなあかんって思った。自分も3年目が終わる時に、担任してみたいし、教諭という立場で、長い目で子ども達と関わってみたいなと、採用試験を受け、なんとか合格して今に至っている。その出会いで、自分も変わらなあかんって思えたことで、今の自分があり、こうやって色々な経験もさせてもらい、出会って大切だなと思っている。

京都 自分で気付くということと、行動するということをどう繋げていくかという思いがそれぞれの実践の中であつたが、自分としては、気付くということと、子どもたちがそれに対して行動するところを繋げるために、1つ大事にしているのは、まずは自分の内側にある差別する心に気づくことかと思っている。滋賀県の報告の中に「キレイゴト」という言葉があったと思うが、例えば、作文、発表、感想文に子どもたちが「差別は絶対にいけないことだと思う」とか「許しちゃいけない」ということを書いていることは結構あると思う。それは間違いではないとは思いますが、ただ、どこか差別を自分の外側に置いているというか、私たち自身も小さな差別心を持っているかなと思っている。例えば、赤は女性の色であるとか、それぞれの偏りみたいなものがあると思うが、そういうところをまずは自分の内側にある差別の心に気づく、偏りに気づく、そのことが行動を起こす内発的な動機、きっかけになるのではないかと思っている。自分の外側に置くからキレイゴトになるし、自分の内側に置くとそれは本音になる。行動に移すためにも自分の内側にある、まずは考え方の偏りに真剣に向き合うことが大事。だから、まず全員が、偏りという差別する心を持っているのではないかというのを伝えていくことが1つ大事なのではないかと思っている。

兵庫 私は部落の人間で、私も中学校3年ぐらいに自分の出生地ということを知られた。高校の時に道徳とか人権学習の時間になると、担任の先生は「お前、自分のことを喋れ」と勧めてくる。自分の意思に関係なく、自分はその出身なんだということを言うことになるが、それは簡単なことではなくて、やはりしんどいことである。学校の先生とか職員とか、部落問題の話をする時に部落の講師さんを選ぼうとする。部落問題を何十年たっても当事者が語らなければ学べないのか。先ほど、自

分の差別心に気づくということを言われましたが、当事者が話すより、そういう自分が気づいたことの話をしてもらった方がみんなのためになるのではないかと思う。先ほど、協力者の方が自分の出生地を知らない子どもが増えているとか、保護者もそういう状況だと話された。私の子どもも結婚して今、地域外で生活している。その事を考えても世の中はそういう状況。そんな中で差別、部落問題だけでなくさまざまな差別の問題を、当事者の話を聞いて気づいた、その思いを語っていくことが大事なのではないかと、今思っている。自分がマジョリティの存在だと思ったら、マイノリティの支援をする、そういう学校、社会にしていけないといけない、そう思っている。

1 日目まとめ

大阪府の報告では、Aさんは厳しい環境に置かれながらも、友人との関わりを通して自己実現への希望や将来像を見だし、前向きに歩み始めた。学校内外の機関と丁寧に連携し、支援を進めていったが、その背景には「学校だけで解決しなければならない」という大人側の固定観念を問い直す必要性があることも示された。仲間や地域、社会とのつながりの中で、差別をなくし、自己実現の力を育むことの重要性が確認された。滋賀県の報告では、Aさんとの出会いを通して、自身の姿勢を厳しく見つめ直し、無意識の差別があることに気づかれた。キレゴトや建前の人権学習に陥っていないかを教育関係者全員が問い直す必要があるという問題提起がなされた。大阪市の報告では、サークル活動を基盤に、意見の多様性に気づく場や共に学ぶ姿勢を重視し、個人の問題を仲間で支え合う、深いところで繋がる集団作りが大切である、ということが確認できた。差別のある社会で生きる子どもたちが身につけるべき力は一体どういったものなのか。そのために我々ができることは一体なんなのか。二日目の報告、総合討論を通して考えていきたい。

(2日目)

一報告4ー①

共に学べる学級を目指して(東京都同教)

一主な質疑と意見一

東京 Aの父の様子を聞きたい。

報告者 Aが小さい頃に離婚されていて保護者は一人でAを育てている。Aの様子から小さい頃に虐待があったのではと言われるが、そのような様子は見受けられない。

大阪 自分の思いをもって学べる学習とはどのようなことをされていたのか。

大阪 「障害者」の学習をもう少し詳しく教えてほしい。

報告者 クラスで何か起こった時には授業をストップしてでもそのことに向き合ってきた。そのようなことで保護者から何か言われたことはなかった。何かあった時には必ず保護者に対して丁寧に説明を

していた。今年度はクラスがえをして自分のクラスに課題の多い子どもを集めた結果、やんちゃな子どもCがAに対して攻撃的になっている。自分がAを大切にしていることをCはおもしろく思っていないが、そんなCも大切にしていきたい。報告にある「自分の思いをもって学べる学習」の自分は「私自身」の思いという意味。学習としてはお話をしてくれる人を招いて学習をしたり、近隣の支援学校とネットでつないで交流したりしている。そのような学習をしていると子どもたちは感想に「優しくしたい」「一緒に楽しめるようにしたい」ということが書かれているが少し子どもたちから遠いところにあると感じている。自分が担任したBがプロ野球選手になり、学校へ来てくれた。Bは片方の耳がない子どもですごくやんちゃだった。そんなBが「Aは自分とそっくりだ」と言ったことでAと周りの子どもに良い変化があった。

三重 自分の勤める支援学校にもAとすごくよく似た子どもがいた。その子どもと重ねて聞いていた。分離教育があたり前になっている中で、職場の中でもそうだとかなりしんどいと思う。周りの教員や管理職はどうだったか。どのように報告者のやっていることをつないでいこうと考えているのか。報告者 今の職場では同じ方向を向いてやっている。過去にはAは学校から「もうこの学校では見れない」と言われたこともある。Aは工業高校に行きたいと考えているので、教員や学校というよりも周りの仲間がお互いに関わり、支えあえるようにしていきたい。

東京 Aの工作が得意なことなど伸ばしていけたらと思うが、高校進学に向けたAの学力をこれからどのように保障していこうと考えているのか。

報告者 Aが学習に向いていけば、どんどん取り戻すことができると思う。4年生の時とはとにかく教室にいることを目標にした。5年生になってAは「勉強を頑張りたい」と言ったが、今はその環境をつくっていないのがとても悔しい。学力とは何かということ考えた時に、自尊感情を高めるなどしていきたい。

滋賀 現在、夜間に中学生が学ぶ自主活動グループの場を担当している。発達障害に対して自主活動グループでやったが失敗した。ずっとグループ活動に来ていた子どもが発達障害のことをやろうとした時だけ来なかった。

報告者 なぜ発達障害を取り上げようと思ったのか。

滋賀 なかなか理解されにくい現状があって、そのことに対して取り組みたいと考えた。

報告者 自分は取り組みの出発点が何なのかが大切だと考えている。自分は目の前の子どもをなんとかしたいと思ってやっていて、そのようにやれば見えてくるものがあると思う。

三重 障害の診断名で判断するのではなくAはAでBはB、そのことに対しての自分の差別性に気づいていくことが障害に対する学習であると考え

る。

東京 自分の過去に勤めていた学校で、診断名があった子どもが周りの保護者から排除を受け、不登校になった。報告を聞いて、Aの心の叫びをしっかりと考え受け止めていくことが大切だと改めて思った。子どもの言葉の裏にはいろいろな思いがある。

報告者 自分にはできることが少ないが、子どもが本音を出した時にしっかりと受け止めていきたいと思う。

東京 4年生の子どもの保護者から初日に「もう学校にいかせません」と言われ、家庭訪問した。3年生の時に「インタースクール」の方が合ってますと言われ、転校を考えていた。その後、登校したが、なかなか友だちとうまくいかないことが多かった。そんな中、少しずつA自身も変わってきたタイミングでコンゴへ帰り、その後は学校へ登校していない。その子どもがこれまでいろいろなところで本音を出していたと思うが、それをうまくキャッチできなかったことが悔しい。

報告者 なんでもかんでもできないが、うまくいかなかった時に、どのような思いで関わったのかが大事だと思う。

Ⅲ 総括討論

協力者 討議の柱の確認

① 進路・学力保障とは何か。

教員がつけたい進路・学力保障は何か、学校ではそのことができているのか。単に出口の保障ではなく、生き方を保障するもの。

② 自尊感情を高め、仲間といかにつなげていくか。

深いところでつながるためにはどのようにするのか。反差別のつながりをつくるためにどのように取り組むのか。

③ さらに地域とつながっていくためには、

行政や地域と子どもや保護者をつなげ、進路、生き方をどのように保障していくか。

④ 分けられる教育があたり前になっているなかでどのように取り組むか、全人教でめざしているインクルーシブ教育はどのようなものか。

新潟 これまでいろいろな思いをもってやってきた小中学校の教員、保護者を引き継ぐのが高校だと考えている。高校の出口は差別のある社会に子どもたちを送り出すことになるので、何をしていくべきなのか考えることが大切である。以前に勤めていた定時制の高校にはさまざまなことを抱えさせられた子どもが通っていた。子ども一人ひとりを丁寧にみていくことができたのは、全人教の場で学んだり、同和教育に出会ったりすることができたからである。卒業してからも子どもとつながっていけるか。差別をする人がいる社会で生きていくために、自分はどのように生きると言えるかが私の考える学力保障である。

大阪 4年目で担任は一週目である。中学校、小学校で講師をしていた。大学では支援教育を学んで

いた。4本目の報告を聞いて、勤務校の状況では人権教育を進めていくことが難しいとされていて、どのように学校を進めていけばよいのか悩んでいる。大阪では分けられる教育はあまり行われていないので、外国籍や発達障害のある子どもたちもともに学んでいくことができている。3年間積み上げていく中で最近、少しお互いの思いがチクチクできたりもしている。その中で、通信で出したものに対して子どもたちからフィードバックする形で子どもたちの中を深めていっている。欠席の多い子どもがいて、本人も保護者もなぜそうなっているのか分からない、そのような状況で欠席が多く、進級、卒業できないことを伝えないといけない。勤務校ではそのような欠席が多く、進級できなくなる子どもが少なからずいることが気になる。自分が大切だと思うことは、一番最後の人に合わせる(待つ)ことだと思う。一番しんどい思いをしている子どもに寄り添うこと。2つめは、子どもをつなげていくことであるとする。中学校での子どものような、なかなかつかめず高校教員も中学校や小学校とつながっていかねばならないと思っている。

滋賀 「キレイゴトでは通じへん」が引つかかる。同和教育を進めていく中で、「やったことない」「わからへん」と言って相談しにくる教員もいる。その教員は箱に書かれたことを書かせる人権教育をしようとしている。それでは通じない。自分の立場から思うことは、地域の子どものことに関して何気ないことは話せるのに、部落問題に関しては何も話せない。そんな中でやる人権学習は本当のものではないと思う。地域、保護者の立場として思うことは、この場にはいない教員はどのように感じてやっているのか疑問に感じている。

東京 自分の実践はうまくいっていないと感じる。自分が関わっていた卒業生が自死を選択したことさらにそのことを強く感じる。昨日の淡路中学校の報告に登場した子どものことがすごく気になっている。報告者にとっては報告にあげるぐらいだから気になっているはずである。報告者がその子どもたちを気にしていかなければならない。自分がこのように言うには、自分がやっていかなければならないと感じている。

報告者(大阪) サクラのことを一番気にかける存在でありたいと思う。

大阪 自分は福井高校の卒業生である。自分が高校時代に受けた人権学習は、いろいろな種をまいてもらったと考えている。また、その中でいろいろな人に会わせてもらったからだと思う。今年度から通級指導教室を担当しているが、週に1回の取り組みの中で何ができるのか疑問に思いながらも、自分自身を見つめ直すキッカケにこの全人教がなった。

協力者 差別をどこにおくのか、差別を自分に向けられるのか外におくのかで人権教育は違う。外であればキレイゴトの人権教育である。実践をともなった取り組みが大切である。

報告者(滋賀) 自分自身が中学校現場で人権教育をしている時は「差別ダメ」と書かせて満足していた。被差別の立場の方に来ていただいて聞き取り学習をした。それをしたら人権学習はうまく着地できたと思っていた。しかし、それは今となっては恥ずかしいと思っている。差別をなくすために主体的に本気で取り組んでいる「びわ南」の人たちをみて、自分もやらないといけないと思っている。今年は前任者の考えたことをそのままやって、お金を払ってお話もしに来ていただいているのに実になっていないと感じている。ここからは学びの体制を整えてやっていきたい。そのために登録者数を増やすことが大切だと思う。そのために啓発ポスターやグッズを作っている。それが完成したら、中学生と一緒に配布して周りたいたいと思う。差別の問題に対して「キレイゴト」で終わらないように、子どもと一緒にやっていきたい。中学生とは部落差別をなくすためにどのようなことができるのか一緒に考えてやっていきたい。自分が今やっていることが、学校現場に戻った時に活かせるようにしなければならない。自分はキレイゴトで子どもと関わってきたので、その鱗をはがすようにして頑張っている。報告レポートを書くのは大変だったけど、励みになるので会場の皆さんからいろいろな発言をお願いしたい。

協力者 今報告者がいる環境は大変うらやましいと感じているし、応援をしている。

栃木 自分は部落のことを子どもから教えてもらった。その当時、部落のことを聞こうとしたら子どもが話せなかった。その裏には差別があったのではないかと思う。そのような出会いを通じて、部落のことを子どもが自ら話せるようにしていくことが大切。同和教育と出会えたから今の自分があると考える。

大阪 豊川中学校には、福井高校や地域とつなげているネットワークがある。その中では、子どものことを中心に話せる環境がある。毎日学校にはくるが1年生の終わりからエスケープするようになった。2年生になって担任として関わったが「中卒でええねん」と言っていた。なんとかクラスに連れていっても周りからは腫れ物に触るような感じになっていた。自分もその空気をつくっていた一人だったと思う。そんな中で部落問題学習をしていった。その最中に、A が不適切な発言をして、向き合うために指導をしたが、A は「今までおまえらは言ってこんかったやんけ」と言った。先生の諦めている雰囲気や態度を感じ取っていた。それでも、自分は分かってほしいからと今の思いを伝えた。その後は少しずつ学習を取り戻すことができた。卒業前には「クラスの仲間がいたからがんばれた」と言っていた。今、関わっている子どもと部落問題学習をつくっていった。その中で反差別の活動をしている人に会わせるような取り組みをした。グループ毎に反差別、差別を残さないようにするためにはどのようなことをしているのか。何が大切なのかを話し

てもらった。いろいろな学習をやってもやっても課題はでてくるが、とにかく大切にしてきたことを伝えて実践をつくり続けていかなければならない。

協力者 差別の現実から学ぶ。自分の方に矢印を向けなければならない。

協力者 「仲間づくり」とは、どのような取り組みなのか、どのようにつなげていくのか明らかにしたい。実践を通して話して欲しい

大阪 大阪では分けられずともに学んでいくことがあたり前である。自分が小中学校に通っていた時は、分けられていて一日で出会うのは朝の会と終わりの会ぐらいだった。その子どもたちが何をどのようにしていたのかまったく分からなかった。現在、大阪市の教員になってそのようなことがなく、いつもクラスの中に特別支援学級の子どもの位置付けられている環境が整っていることに気づけた。一方で、どの子どもに対してもしっかりと生き方を保障するために指導もしている。特別支援学級の子どものみだけでなく、困っている仲間がいれば誰でもあっても寄り添うことが大切であると子どもに伝えている。1年生入学時に学校として大事にしていることとして、子どもにも保護者にもそのことを伝えている。小1のある子どもが、算数が苦手になってきて、抽出授業をするにあたって保護者は心配された。すると、その子どもは「そんなんでいじめられへんで。このクラスはそんなクラスちゃうで」と言った。そのことによって、分けられない教育があたり前になっていることを実感できた。自分の地域の電車での毎日の出来事だが、大声で話す人がいて避けるようにしている大人がいる中で、学生や子どもはあまりそのことを気にせず電車に乗っている。そのようにいろいろな人と関われる人であってほしいと思う。

三重 大阪のインクルーシブ教育に関して私も非常にうらやましいなと思った。進路保障に関して、自分たちが関わるのがとても大切だと思う。過去に関わった子どもが、在学中に特別支援学級になり、卒業した。高校は実は途中でやめてしまい、その後亡くなってしまった。その子どもの家に行った時に、母が「やっぱり支援学級に入れずに、みんなと一緒に勉強させたかったな」と言われた。そのことによって自分は保護者や本人の思いを何もつかめていなかったと思った。母は文字をしっかりと書けない中で子育てをしていた。そのような厳しい状況で育てているのに、本当の思いをつかめていなかった。本当の進路保障とはどういうものなのか、人の幸せを本気で考えていかなければならない。自分にとっても優しくしてくれた祖母が「部落の人とは結婚してほしくない」と言っていた。実際、結婚する時に「あんたが選んで、幸せになるのなら誰でもいい」と言ってくれた。やはり、人権学習は人の幸せを願いやっていくことが大切である。

香川 原点がある人は強いなと思う。ある生徒が学校で講演会があるときに「先生、おれあそこに住んでるやろ」と言った。そのことが私の原点である。

仲間がいることはすごくありがたい。みんなでやっていけるということは本当に心強い。子どもたちは、今の居場所を離れて社会にでて胸をはって、自分のことを話せる人になってほしいと思い、今も頑張っている。

兵庫 人権教育指導員をしている。初めて出会う人、今後出会わないかもしれない人に、自分のことを話すのはとても緊張する。自分たちは一回話したらそれで終わってしまう。教員はそうではないからやり続けられる。部落差別を根幹に据えて人権教育をやっている話を今回聞いてよかった。自分の家族のことでは、性について自分自身の中に引っかかりがあってそれを自分の子どもには見抜かれていた。自分の家族がそのことを話したいと思うことができる環境をつくりきることができていなかった。ここに来て、いろいろな先生が頑張っている姿を確認できた。

大阪 福井高校がいい学校だと聞いていたが、実際の話を受けてよかった。自分は人権担当2年目だが、こういう場所に来ていろいろ学んで広めていくようにしている。「キレイゴト」の外からの見え方はキレイである。その中に何をいかにつめていくかが大事である。報告の場に大阪市の仲間が来ていることがよいと思う。仲間づくりを進めていく自分たちが仲間づくりをしていなければ、子どもたちに伝わらない。

大阪 自分自身は車椅子ユーザーであり、小さいころからみんなの中に入って、もまれてきた。一方で、同じ立場の人との関わりは少なかったなと思う。学校で行っている集会では、子どもたちが自己開示をしていっている。このような場所でいろいろな人とつながっていきたいと思う。

2日間のまとめ

本分科会では、「進路保障・学力保障とは何か」が大きなテーマであり、点数や技能ではなく、子どもが自分や仲間を大切に、社会とつながりながら生き抜く力を育てることこそ真の進路・学力保証であることが確認された。人権教育は命に関わる教育であり、知識だけでなく行動できる子どもを育てるため、学校・行政・地域が連携し、生活のリアルにつながる学習を行うこと、「一緒にいる」経験を何よりも大切にすべきであるということも討議の中で確認された。多様な仲間と共に過ごし、その子自身を知り、理解することが、反差別のつながりをつくる土台となると考える。また、大人は子どもの声を丁寧に受け止め、諦めずに関わり続ける姿勢が求められるということも強く心に残った。私たち大人は、日々、自分の在り方、立ち位置は大丈夫なのかということを自分に問い続けていかなければならないと思う。排除する大人を子どもたちは見抜いていく。教師が「しんどい子を何とかしたい」と試行錯誤しながら向き合う姿は、しんどい子だけでなく、周囲の子どもも元気にしていく。さらに、大人同士が互いに頼り合い、学校・地域・保護者がつながる姿を示すことで、「つながる温かさ」「しん

どいことがあってもつながれているから大丈夫」と思える社会を作ることの重要性も強調された。全人教大会を通じ、差別を許さない社会をつくるために、つながりを大切にしながら行動する子どもを育てる意義が改めて共有された。

報告者

①今いるA、これから出会うAとどのようにしていけるのか考えるきっかけになった。

②ここに来て、自分の中で整理ができた。今後、教育に戻るときにいろいろ考えておかなければならないが、大事なことを確認する機会になった。

③自分が今勤めている学校は人権学習が活発ではないが、子どもの仲間づくりを含めて一生懸命頑張っていていきたい。

④報告は大変やったけど、明日から頑張っていこうと思える大会になった。過去の中2の生徒の作文。

⑤ここに来て思うことは、東京からみると、空っぽでも箱があるだけいいなと思う。明日は学校にいけるか分からないが、これからも子どもたちに学力・進路を保障していきたいと思う。